

## Zora Neale Hurston 研究 : *Seraph on the Suwanee*

——心の自由を求めて——

前 川 裕 治

A Study of Zora Neale Hurston: *Seraph on the Suwanee*

——Freedom Is Something Internal——

Yuji MAEKAWA

### ABSTRACT

*Seraph on the Suwanee* had trouble being published. Zora Neale Hurston wanted to publish it from the Lippincott, which had published all of her former works but refused to continue to publish it. They were not satisfied with Hurston's original idea about *Seraph*. With Rawling's help, a white friend of hers, she could finally publish it from the Scribners'. The first printing sold well, but because of her personal affairs, this work gradually disappeared from the shelves of bookstores.

This work has also been negatively evaluated for some reasons. One of them is that it was taken as an assimilationist work to the white culture. Hurston had written her works using black people except *Moses, Man of the Mountain*. The readers were not satisfied with its white characters and criticized it in the way that she forsook her own black culture. The second reason is that the readers, especially the feminist readers, felt embarrassed with Arvay's last decision, which seemed to them that she accepted the chauvinistic way of life.

The standpoint of my reading *Seraph* is to probe these negative evaluations, reading *Seraph* intensively, and checking Hurston's former works and to judge whether Hurston maintains her theme coherently.

### I は じ め に

Zora Neale Hurston の最後の作品となった *Seraph on the Suwanee* は1948年に Scribner より出版された。作品の主人公は南部の poor white 出身で、1884年生まれの Arvay Henson が

4歳年上の元金持ちの black Irish の血をひく Jim Meserve と結婚し、全般に渡って劣等感にさいなまれ、悪戦苦闘を繰り返し、最後は一つの認識に到達する一種の開眼物語である。

Hurston は *Moses, Man of the Mountain* で黒人ではない登場人物を使った作品を描いたが、完全にアメリカの白人を主人公にした作品を書いたのは、この作品が初めてである。その為、作品に対する読者の反応は様々であった。何故、黒人でなく、白人を描くのか、黒人文化を捨てたのかとも思われた。それは、今までの作品が究極的に登場人物の拠り所が（アフリカ伝来の）黒人の大衆文化になっていると読まれる場合が多かったからだ。また、Arvey が悪戦苦闘する対象が sexism によるものと思えながら、結局、最後、sexism に屈服しているようにも見える決意をすることにも反応は厳しかった。

Hurston は *Seraph* で豹変したのであろうか。今まで追い求めてきたテーマから逸脱する道を選んだのだろうか。この小論では、作品の周辺部分をまとめた後、まず、Arvey の持っていたと思える意識構造を、次いで、それと彼女を取り巻く周辺の人々との関わりを細かく分析する。そういう中で、自立の道を歩み始めようとする彼女は、黒人の場合は黒人文化を拠り所とすることが出来たが、何を拠り所として、どのように自分を捉えることで、歩みを前に進めることが出来たのか、また、そのような彼女の歩みが最終的にはどんなことを可能にするのかについて分析をしていく。このことは同時に Hurston が *Seraph* で変わったのかどうかを判断する拠り所ともなる。

## II 作品の周辺

*Seraph on the Suwanee* の出版は相当難産であった。1942年の末に *Dust Tracks on a Road* を Lippincott から出版して、黒人達からの評価は否定的だったが、全般的には評判は上々で、その証拠に *Saturday Review* から賞を貰っている。評価は黒人の文化を的確に表現しているというものであった。1943年に入っても、彼女は活発であった。念願の船を購入できたし、Howard 大学からは名誉同窓生の称号を贈られている。エッセイや短編も発表していて、順調であった。しかし、1945年に黒人の上流階級を扱った“Mrs. Doctor”を書いて Lippincott に送ったが、拒否される。元々計画的な生活をおくるところのなかった Hurston に特別の蓄えなどなかった。資金稼ぎの為に New York で政治に首を突っ込むことも行った。お金が欲しかった大きな理由は、この頃、彼女の中に Honduras に行つて Maya 遺跡（今の Belize というところのジャングルの中にマヤ人の昔の町が存在するという話を聞いて、それに興味を持ったのである。）を調べたいという気持ちがあったからである。しかし、彼女の計画に賛成してくれ、資金を出してくれる出版社はなかった。Lippincott も彼女には見切りをつけ、八方塞

がりの状態の時、フロリダ作家の Marjorie Kinnan Rawlings が彼女を Scribner 社に紹介してくれる。Rawlings の住んでいた家は今でも博物館としてフロリダ州の Gainesville 郊外に残っているが、そこに Hurston はよく話しに行っていたようである。Rawlings の手紙 (Bigelow) を読むと、白人として見下した面がないではないが、全体的には Hurston を正当に扱っていたようだ。Scribner が次作を書くという約束の版権の前金として \$ 500 を支払うと、すぐに Hurston は Honduras に向かい、Puerto Cortes のホテルで *Seraph* を書き始める。結局、彼女は Maya 遺跡の調査をすることはなく、*Seraph* の執筆に専念するのだった。1947 年の秋には作品の全体は完成したようで (Porter, 80-81)、その後数ヶ月掛けて推敲したようである。そして、翌年の 1948 年の 2 月には完成した原稿を持って New York に戻って行く。フロリダ大学にあるオリジナルの原稿を見ても、修正されたところはあまりなく、この時彼女が持って行った原稿があまり間合いを置くことなく印刷に回され、10 月には出版ということになる。

第一刷で 3000 部印刷されたが、売れ行きは順調であった。それに応えて、Scribner は二刷を 2000 部出すが、売れ行きは急激に悪くなり、本屋も店頭から本を引き上げてしまった。それは 1948 年 9 月 13 日に Hurston が New York 警察に少年虐待の罪で逮捕され、そのことを黒人新聞の *Baltimore Afro-American* が大見出しつきで報道したからである。Scribner は弁護士を立てて彼女の援助をし、結局は、事件が起きたとされる時期の Hurston のアリバイが証明され、無罪放免になるのだが、それは翌年の 3 月のことであった。白人の新聞はこの事件に対して殆ど反応しなかったにも拘わらず、黒人新聞が確たる証拠もないのに大々的に報道したことに対して、Hurston のショックは大きかった。それ以上に、この事件をきっかけに作家 Hurston の姿は表の舞台から徐々に退いて行く。

評価に関しては、一つには当時流行していたフロイトの精神分析に則った作品として読まれる傾向で、Arvey を精神病的人物として描いているという分析をする。この火付け役は Slaughter (24) で、更に発展させたのは、C. M. Hughes である。Hughes は Arvey の最初の性的抑制が彼女の人生の総てを左右しているところがフロイト的だと説明し、その経験の為にどんなことがあっても解放されることがない、それだけ最初の性的抑制が潜在化している (173-74) と見ているのだ。上記の Slaughter はフロイト精神分析を使いながら、フロリダを上手に描いていると肯定的である。

次の傾向は、作品が同化的傾向になっているという見方である。時代的に黒人作家が白人を描くようになった時代にあり、*Seraph* をその角度で読もうとする批評である。Bone (169) では南部の田舎は残したが、黒人大衆文化を捨てた “Assimilationist novel” としているし、Rayson (17) も “a new trend” に従っている作品と言う。また、Turner (115) も

Meisenhelder (80) も Cart-Sigglow (136) も同じく、同化的傾向の作品と見ている。同化傾向の作品と読む批評の評価は、概して、否定的で、従来の黒人大衆文化に焦点を当てて書いていたところにこそ良さがあったのに、それを捨てて、普遍化させようとしたが為に “worst novel” (Washington, 21) となり “soap opera” (Washington, 22) と変わらないと、手厳しいのである。

*Seraph* は否定的評価を受けていただけかと言うと、そうでもない。上記したように、作品の売れ行きは良好で、出版社は二刷を出す程であった。これは book review を書いた Hedden や Hamilton の肯定的見方とも一致する。また St. Clair (38) のように、Arvay の抵抗と自己発展という視点からは評価されるべき作品と、肯定的に受け止めている批評家もいる。

確かに Arvay の葛藤は白人、黒人に関係なく、総ての人間が持つ自己否定から来るもので、それからの脱出へのものがきも、普遍的な要素と言える。この意味では、Hurston が今までの作品で探求して来たテーマで、その継続性を認めることが出来る。しかし、人物設定で Dance (342) が言うように、何故「インスピレーションと創造性の源である黒人文化を捨てる」のかという印象を読者が持ちたくなる面は確かにある。しかし、それも Hurston の一つの狙いだと考えられる。

この作品には feminism 的批評家は近づきにくいようである。sexism を焦点に、Hurston の全体像にと取り組んだ Schmidt ですら、sexism を越えた作品として “... break through the barrier of sexism that we have inherited through our cultural and political systems.” (224) と言わざるを得ないようだ。それは Arvay が、男性中心的基準の中で葛藤しながらも、最後の目覚めと思える場面では、結局、Jim に従うかのような発言をするからである。しかし、本当に sexism に屈服したかどうかは精査しなければならないところだ。

### Ⅲ 内 なる 病

主人公の Arvay に劣等感を抱かせる要素は当然のこととして、彼女の所属感と深い関わりがある。その典型的な意識を三つ取り上げ、彼女の劣等感との関わりについて見ていく。

まず第一に、彼女の中にあった poor white としての意識が及ぼす影響について考えて行く。彼女が結婚前に住んでいた Sawley という町は1000人弱の白人の住む小さな町であった。その作品の、この時期の時代背景は1900年代で、時代的に言って、馬車に代わって車が使われるようになったことで説明されているように、機械化が始まった時期である。

Arvay の持つ物質的な貧しさからくる劣等感の認識は Jim Meserve と結婚したことに端を発している。元々 poor white ではない夫の Jim との間には、二人が結婚する前から、階級的

に見て、埋めがたい溝があった。Carl Middleton との関係で、一種の男性不信に陥っていたにも拘わらず、Jim の強引なやり方に、結果的には、屈服する形で結婚していく彼女の心は、物質的豊かさに対して屈服していくのである。貧しさに対する劣等意識が最も如実に表面化する最初の例は、二人の最初の子供の Earl が handicap を背負って生まれてきた時だ。異様な息子の外見を見て、“The one who was sort of queer in his head.” (61) と表現されている自分の母の弟に似ていることが気になる Arvay の中には、自分の血統の中に、handicap を生み出す血が流れているという意識があった。そのことはこの部分が三人称による語りではなく、Arvay の心の描写を表現する為の free indirect discourse で描かれているということでも確認できる。更に、結婚後の Jim の仕事の成功が、物質的豊かな生活を Arvay にもたらせ、それが為に一方では二人の溝が深まっているにも拘わらず、他方では充実した気持ちを高め、自信と勇気を強めて行き、poor white に対して批判的発言を繰り返すようになることは、逆説的な形で劣等感が彼女の中にある歪んだ優越感として表れて来ていることを示しているのだ。それが具体的に表面化するのとは彼女の中の差別意識である。彼女は poor white のことを “Even niggers is better than we is ...” (111) と言いながら、他方では Jim の下で働いている黒人の Joe に対して否定的反応を示す。同じ拒否的反応を Joe 一家の後、Jim の仕事を手伝う Corregio 一家に対しても彼女は示す。Joe 一家に対しては、彼らが黒人だということが、Corregio 一家に対しては彼らがポルトガル人、即ち、外国人であるということが、Arvay に拒否反応を起こさせている。彼女の中に白人としての優越感があるために、二人の家族を受け入れることが出来ないのである。この優越感が、彼女が豊かになればなる程、その度合いを強めていくことを考えると、彼女の poor white としての劣等感が逆説的な形で表現されようとしていると言える。

第二に、Arvay の中にあった劣等感に通じる意識として考えられることは、キリスト教徒としての意識である。彼女の中のキリスト教精神は子供の頃形成されたようだ。それは結婚する前の Jim に Arvay が紹介する playhouse の話から分かる。彼女は彼に子供の頃の楽しい思い出を語った後、“I found out that Heaven was so far off .... I knewed that Heaven was further than folks made out it was.” (45) と言っている。ここで注目したいところは、神は案外遠くにいることが分かったという一種の悟りに似た彼女の言葉ではなく、このような言葉を発する状況下に彼女が育ったということである。神の存在の有無やここで言う神の存在の遠さに気付くということは、彼女が神について色々考える環境の中にいたから出来ることなのである。このような環境が彼女の中にキリスト教の精神、とりわけ、父がその playhouse を造ったということからも分かるように、女の子を男性の性から守るための道徳観、倫理観を植え付けていったと言える。この子供の頃植え付けられたキリスト教の精神が彼女が生きてい

く際の一つの基準になっている。その典型が Carl と彼女の関係である。彼女は Carl に恋心を持っていたが、姉の Lorraine と Carl が結婚すると、5年の間、一切男性を寄せ付けることはなく、教会の為だけの生活をおくっている。既述したように、口では神を否定的に言いながら、彼女の中には、キリスト教的観念が潜在意識化していたのである。だから教会に Jim と一緒に行った Arvey は人々の眼が気になり、小さくなっているのである。

Arvey looked down over her shoulder and dwindled down in helpless misery. What could she do? She would die before she let folks see her out there on a public road tussling and scuffling with a man. It would cause all kinds of talk, say she was letting a man get common with her. (17-18)

キリスト教的倫理観が、彼女が結婚した後、表面化してくることを見ても、いかに彼女の中で支配力を持っていたかが分かる。例えば、Jim が Fast Mary といういかかわしい女と話しているのを見て、二人の関係が心配になって家から飛び出し、二人の間に割って入るということも、娘の Angie が恋心を寄せている Hatton というボーイフレンドへの思いを、ダンスで彼と一緒にあって、キスもしたし、それ以降彼は少しは自分のことを気に留めてくれるようになったと、Arvey に説明する時、“But I never thought a girl of mine would put herself in the way of a man like that. I thought that she would look upon herself more than that. I’m hurt to my heart to hear it.” (152) という彼女が、Angie の話をこころよく思っていないことも、彼女の中に性的にふしだらであることは許されないというキリスト教的倫理観があるからだ。

彼女を最も苦しめることは、Carl が Lorraine と結婚した後も、彼のことを思っていたという “mental adultery” (31) を自分がしていたという「認識」である。その為に handicap の子供の Earl が “punishment” (62) や “chastisement” として自分に降りかかっていると考えるのである。彼女は心の中で Earl のことをキリスト教のいわば原罪的な意識で捉えているのだ。だから、彼女は Earl と自分を一体化して捉え、人々が行う彼への批判を自分への批判と思い、神を汚す劣等な存在と考える方向性を強めて、内向化して行くのである。

彼女がキリスト教的世界に内向して行く面は、Corregio 家がキリスト教徒でないことを否定の根拠にしていることにも表れている。自分の息子が異教徒に奪われるという見方しか彼女には出来ないのである。

And right here, in these United States, a Bible land, and a praying and gospel

country, were these two naked huzzy-heathens trying to pass themselves off as folks, white folks at that, and doing their level best to tole her son off from her. They were no different from that awful Herodias and her daughter Salome who had got John the Baptist killed for nothing. (212)

このように彼女の中にあるキリスト教的価値観は、poor white の意識にあった「貧しさ」そのものが劣等感に直結していたのと違って、彼女の劣等感を誘発させる働きをしている。即ち、キリスト教的価値観の為に彼女の世界が限定的なものとなり、他者との交わりがうまく行かなくなることが、自らの適応性への疑念に通じ、劣等感を強めて行くことになっている。

第三に、Arvay の中にあった劣等感に通じる意識として、南部人としての意識がある。Arvay が結婚前に住んでいた Sawley という村は、“The Spanish moss hung down around everywhere ....” (2)から分かるように、典型的な深南部の南端に位置している<sup>1)</sup>、そこで育った彼女は“a daughter of the South” (54)なのである。彼女が南部的であることは、既述した poor white 意識やキリスト教徒的意識にも見られることだ。描き方の工夫によって、その特徴付けを狙っているところもある。作品の最初のあたりで、Jim が黒人的な法螺話をして、彼女が腹を立てる場面があるが、その直後に、Jim の眼を通して Arvay の家の内部が描写される。この家が南部の普通の家庭であることは、“usual things” (26) や “always” (27) を繰り返すことで示されようとしている。しかも、Lee 将軍の絵が聖書や父母の結婚の写真と一緒に飾ってあることも、更に、南部の家庭の雰囲気を描き出していると言える。

南部の雰囲気の中で育ったということは、北部との溝を生来持っているということである。Sawley は北部人にとって、実は魅力のない村だという。“Nobody gave these Yankees any particular encouragement to settle around Sawley.” (2) という描写は、そこで育った Arvay の北部に対する複雑な潜在意識を物語っている。彼女のこの意識が如実に表れるのは、娘の Angie の恋人の Hatton Howland が北部人だと分かった時である。

“Hatton Howland? Ain’t that that Yankee boy that drives that blue chevvy and works at the filling station? .... But he’s a Yankee, Angie, and you’re born and raised up in the South, and to mingle up like that ain’t——” (151)

この表現から分かることは、彼女が、一方では北部が車に象徴される物質的豊かさを持っていることに対して劣等感を抱き、他方ではガソリンスタンドのようなところで働いていることをあげへつらうように言うことを通して蔑視的に捉えていることを示そうとしている。更に、別

のところでは Hatton のことを “the Yankee scamp” (156) と揶揄している。彼女のこういった複雑な潜在意識が南北戦争に遡ることは、“Done burnt out and robbed and murdered all over the South, and now come back to take the under-currents of my child [Angie]!” (156) という言葉からも分かる。南北戦争で南部が北部に敗北したことで、南部人の中に、敗者が常に抱く劣等感と歪んだ形で表面化する優越感が同時的に生まれた。即ち、北部に破れたことで、南部的アイデンティティをいかに保持するかという問題に直面することになった。南北戦争の結果は南部の北部化を意味しており、このことは、南部そのものの消滅の可能性を意味していた。南部の火を消さないためにも、南部はどんな方法にせよ、北部に勝っているという認識が必要だったのである。この意識が北部に対する過度な競争心となって表面化し、北部を部分的に極端に否定すると同時に、南部を部分的に極端に正当化する意識構造が形成されて行く。その為、南部に対して否定的と思えることに対しては、全て敵対的になってしまう。Arvay の場合は、これを Jim との関係にも認めることが出来る。Jim の兄や父達は昔の南部を守ろうとしたが、Jim は、機械化、物質化していくことと関わっていくことからして、北部化していき、南部的傾向を捨てる方向を選んだことが分かる。南部的性質を保持したい Arvay にとって、このような方向性そのものを認めることは出来ないのである。しかし、現実には New South 運動に見られたように、敗北者南部の存在の確認の仕方は、北部的になる、別な言い方をすると、北部の付属品的になる、北部の奴隸的存在となる、ことによつてのみ可能だったと言える。この南部が北部との関わりで、歴史的に経験したことは、Arvay が Jim との関わりで経験することと同じことなのである。彼女は結婚以来、Jim の付属品的存在で、Jim の奴隸的存在になることによつてのみ、存在の確認が出来る状況に置かれていたからだ<sup>2)</sup>。

Hurston の文学は Florida 州の Eatonville を中心に展開されていることは周知のことである。Eatonville という地が大切な地であると言いながら、“John Redding Goes to Sea” から始まる Eatonville の世界は、絶えず逃亡の対象になっていたことも事実である。作品の世界だけでなく、実生活の面でも Hurston にとって Eatonville は煩わしい場所でもあった。母の死後、Eatonville は彼女から遠のくばかりで、1917年には、念願の北部に到達している。そして、10年後の1927年の2月になって Florida にようやく戻って来る。勿論、その10年間に彼女の中で Eatonville が捉え直されていることは間違いない。だからこそ、彼女は戻って来たわけだが、作品の世界も実生活も Eatonville は大切な場所でもあったが、抜け出す対象の場所でもあったのだ。

Seraph の Arvay の中にもこの「脱出」志向と同じ意識構造があったと言える。poor white やキリスト教徒、南部人として、彼女が抱く劣等感や歪んだ形で表出する優越感は、例えば、poor white でありたくないという気持ちが根底にあるから生まれて来るのである。このよう



な自分の置かれている状況から逃れたいという意識が、即ち、分かり易く言えば、黒人でありながら黒人である状態から逃れて白人でありたいとする意識が、DuBois の言葉を使えば、“double consciousness”ということになるが、Arvey の中にもあったのである。

このような二重意識構造はどこにでも、誰にでも存在する意識だと言えよう。Ralph Ellison はこのような意識は普通誰にでもある意識だとして、次のように言う。

Now I know men are different that all life is divided and that only in division is there true health. (Ellison, 499)

確かに人種、性別を越えて我々の中に二重意識は存在すると考えても良さそうだが、それが本当に“true health”かどうかという点と必ずしもそうではない。例えば、Richard Wright を考えてみるといい。彼は脱出を繰り返した作家という言われ方をすることがある。南部を、家族を、アメリカを、黒人を、次々に捨てながら、脱出を繰り返した彼が辿り着いた先は、あまり幸せとは言えない。それは、脱出には必ず対象がその両側に存在するからだ。即ち、出発点と到達点である。脱出への誘惑は、出発点への不満や否定意識なくして生じることは、まず考えられない。出発点への不満、否定意識から脱出した先の、一応の到達点は、また次の出発点になり、脱出は繰り返されることになる。そして、その脱出が繰り返されるが故に、所属を持たない苦しみを持たざるを得なくなる。Arvey にとっても、劣等感の裏にはこういった脱出を繰り返すことによって生じる苦しみがあったのである。しかも、更にやっかいなことは、脱出を繰り返していく時、必ず伴うことが、所属願望と裏腹の関係にあることから分かるように、自己を否定する形で脱出を繰り返していくことになるということだ。例えば、Arvey の中の隠れた北部願望は南部人としての自分自身を、結局は否定することでしか成立し得ないのだ。この意味で、二重意識は決して“true health”とは言えない。Arvey の姿が何よりもそれを物語っている。

#### Ⅳ 周辺の強い力

St. Clair (48) によると、*Seraph* の出版された1940年代は保守的な時代で、女が反対したり、自己主張をすることが否定的に捉えられていたということだ。しかも、かといって、受け身的になり、従属的過ぎると、今度は重荷として受け止められるような時代で、女性にとっては難しい時代だった。Jim の態度は、女性に対してその時代の社会が要求することを象徴的に表していると説明している。

このような時代にあって、男性の側に立って言うと、男らしさを示す必要があったという言い方が可能である。Jim が結婚前に Arvay の気を惹こうとして話す、自分が木こりの責任者だったということも、工作中稲妻が当たったが平気だったということも、自分の男らしさを説明しようとしている典型的場面である。

女性はこのような強い男は素晴らしいと思うと同時に、女である自分是对抗できないという意識を持つのである。それを持たせることが、その時代の社会の狙いであったことが、様々な形で表現されている。その一つが Jim に強姦を思わせる行為を二回行わせていることである。一度は結婚の申し込みの時ともう一度は Arvay が反抗的な時である。それに対して、共に彼女は従属的行動で応え、彼は自分の強さと彼女の弱さを確認するかのようにより “hug my neck” を繰り返すのである。このことに加えて、Arvay に依存を要求する言葉が結婚後何度も繰り返されていることを見ると、強姦と結婚とが男の強さと象徴的に連関していることが分かる。蛇の事件も男らしさを示すための典型だと言える。蛇は既に “Sweat” で Sykes が Delia に対して男らしさを示すために使っていることから、“phallic ... symbolism” (Hemenway, 311) と直結させることは容易である。ただ、Jim の場合は *Jonah’s* で John が Lucy に対して蛇を使う時のように、蛇を愛の表現の為に使おうとしているところが Sykes と異なる。強姦が愛の表現の一つであったと同じ意味で、蛇も使われているのである。Jim の証言を見てみよう。

... Jim Meserve, the man that’s been loving you so hard for twenty-odd years, thought that he saw a chance to do something big and brave and full of manhood, thinking maybe he might win admiration out of you and compliments and a big hug around his neck. He knowed all the time how dangerous it was, and that he had a chance to lose, but he was a man in love, so he took the chance. With Jeff around, Jim just barely broke even, that is, with the snake. He lost heavy otherwise. That was really what happened out there today, Arvay.” (229)

自分の今日の行いは「男」と「愛」を示す為の行為であったと彼は念を押しているのだ。

男らしさと経済力とは比例すると Jim は考えている。まず、Meisenhelder の分析を見て見る。

Despite his persuasive talk, Hurston shows in the novel, however, how all of his behavior—towards his wife, towards his work, towards Nature—stems from a materialistic domineering mindset that underlines white culture. (82)

Meisenhelder の分析は一部正しいが、それが白人文化に潜在するという方向に議論を持っていくことは間違っている。それは、*Seraph* までの Hurston の作品を見ると、黒人も同じように物質的豊かさを、男らしさと繋げて捉えているからである。例えば、*Their Eyes* の Joe Clarke や “Spunk” の Spunk や人々が考えることはその典型的な例である。それと同じように Jim も男らしさを強調する時、金の力、物の力でそれを示すものだと考えている。次の引用は Angie の夫になろうとしている Hatton に対して、男のあるべき姿を Jim が説明しているところである。

.... I don't favor nobody marrying for nothing but pure love, and when he comes to that, he ought to be able and willing to do the last thing on earth to look after his woman and the children they might have. That oath he took before God and man when he stood on the floor ought to come in front of everything else on earth. No excuses granted nor accepted. Come pay-day, leave your pretty wife sit on her front porch and look down the road and say with a smile, 'Well here come my husband and them'.' (159)

愛と男らしさと物とがいかに彼の頭の中で強く結びついてたかが分かる。

以上のような出来事の描写に加えて、作品の構造的な面でも男とは強いものだという印象を読者に持たせようとする工夫がしてある。例えば、全体的に作品は3人称の語り手によって展開されて行くが、その視点は Jim の側にいつもあり、絶えず Arvay に対しては、批判的展開になっている<sup>3)</sup>。その語り手が引っ込み、対話が展開される時も、Jim の直接的言葉の方が重視され、Arvay の言葉は心の中にしまわれた形、即ち、free indirect discourse の形で表される場合が多い。また、Jim の物質的有能ぶりが Arvay の苦しみ左右させることはない。それは作品の中で Jim のビジネスが着実に成功をおさめていくことを見ても分かる。また、最後の場面まで Arvay が Jim の仕事と関わることはないのだ。密造酒の件で、Arvay は Jim に不平を言い、Joe を辞めさせるが、彼女の Jim の仕事への関わり方は、せいぜいその程度なのである。それに加え、Jim をはじめとして、Joe や Corregio, Hatton といった、作品に登場する男性の葛藤が、Arvay と比べると、極端に少ないことも、女性の弱さ、男性の強さを暗示することに役立っている。このように *Seraph* に接した読者は男は強い存在で、女とはその逆に弱い存在だということを強く印象付けられるのである。

白人が黒人を押さえ込む為に効果的に利用した支配者としての戦略は、ステレオタイプ化である。黒人の男性に対しては Uncle Tom という従順な黒人を演じることを一方では要求し、

他方では凶暴な Bigger Thomas のような黒人であることも要求した。黒人の女性に対しても、同じようなステレオタイプで、一方では Aunt Jemima を、他方では Sapphire を演じることを強制した。ステレオタイプ化によって、彼ら一人一人は独自性を失い、一人の人間としての声を失っていったという言い方が出来る。

性差別の力の下でも、男性から女性に対するステレオタイプの要求により、女性は一人の人間としての声を奪われる方向性に置かれていた。*Seraph* の世界では、Arvay を通してステレオタイプ化が求められた女性を描いているという面が印象深い。

求められる最も基本的な女性像は、依存的存在であることだ。Arvay を含めて彼女の周囲の人を見ていくとそれが明らかになって来る。Arvay は結婚前 Carl との結婚し関しても、結局自分の気持ちをあかすことはなく、ただ Carl の行動を期待しているだけであった。結婚後も、人生に於ける決定には加わらず、ただ Jim にいつもついて行くという行動を繰り返すだけだった。Arvay だけでなく、Angie にも Hatton に対し、彼に好かれる為の髪型をしたりポーズをとったりするところがある。社会の一つの基準として女性は男性に依存的存在であるべしという考え方が存在していたのである。それは女性は男性の付属品的存在だという意識が基本にあった為、教会で男女のカップルを造る儀式で、Jim が自分の相手になると分かると、Arvay は “an exhilaration that she had never known before” (21) を感じるのである。それは “She belonged to something.” (21) という文に窺えるように、男に付属出来たからである。だから、女の最大の幸せは結婚なのである。それは良い女である条件として、即ち、女性性の証明として、良い男を手に入れることが必要という考え方で社会は動いていたからだ。だから Arvay の中には一方では男性を拒んでいるように見えながら、いつも、mulberry tree に象徴されているように、男性願望があったのだ<sup>4)</sup>。また、Jim と Arvay の結婚がそういった男と女の関係の捉え方の中で進行したことが、二人の結婚までの描写から分かる。二人の結婚への心の高まりが描かれることはほとんどない反面、周りの女性の Arvay への嫉妬や、噂が中心的に描かれていることは、二人は愛情を育て結婚にゴールインしたのではなく、社会の女性に対する見方、結婚観に支配された形で結婚していったことを物語っている。

男性に対する依存的志向には、女とは無能な存在だから依存するという前提が男性の中にも女性の中にも存在している。女は何も分からなく、 “... were given to thinking nohow.” (93) なので、 “by her feelings and not by conscious reasoning” (100) の生き方しか出来ない。だから、守って貰わなければならないのだという考え方がある。依存的傾向が形成され、定着していく中で、女性は無意識的に劣等感を内在化させる。そのことは、女性を弱くさせていくことであり、弱い女対強い男というバランスを男性側に傾斜させていくことに通じる。だから、これにより益々男性性は高まって行くという結果になる。Arvay のヒステリックと思える精

神状態が作品の進行と共に高まっていくのは、この為である<sup>5)</sup>。彼女の無能さが増せば増す程、即ち、男性への依存度が高まれば高まる程、Jim との差が生じ、Jim の有能さが増すという仕組みなのである。

女性は無意識的に男性性を支える役を、依存的になることで求められていたが、意識的に男らしさを支える役も要求されていたといえる。女性が男らしさを支える方法は、意図的に自分は弱い存在なのだ、駄目な存在なのだということを、黒人男性で言えば、Uncle Tom なのだというを示す必要がある。逆な言い方をすると、Turner が “she will not look at life rationally....” (112) と言っているように、未熟な女であるようにすることが男性性を支えることになっていたのだ。ここに racism と同じ構図があることが分かる。

更に、もっと明確な形で男性性の支えになっていた面を表すこととしては、立派な子供を産む必要があるということである。Arvay もその構図の中で考えている。

Arvay thought that it would be herself when and if she could birth Jim a perfect child and by this means tie him forever to her. (68)

妻として立派な子供を産むということが役割だという認識が彼女にある。そうすることで、夫の男性性を高めることが出来るからである。実際、Jim の態度を見てみると、障害児の Earl が生まれた後と、二番目の Angie や三番目の Kenny が生まれた後では大きく異なっているし、Angie 誕生後は自分で男としての強さを再確認する為であるかのように、外で喧嘩をよくするようになっている。同じ考え方が既に、“The Gilded” で使われている<sup>6)</sup> ように、子供を産ませられるということが男らしさに通じている為、子供が産めない女性は、男らしさを失墜させるとして否定されるのである。

蛇の事件を少し角度を変えて見てみると、その裏に隠された意味が明らかになり、何故 Arvay が動けなかったかが分かって来る。Royster はこの蛇の事件を “In *Seraph*, as in *Their Eyes*, thinking and acting constitute the formula for human fulfillment.” (144) と言い、自己達成のチャンスだったのに行動に出なかった Arvay が悪いように言う。この説明は Jim の “All right, Arvay. You had the biggest chance in the world to make a great woman out of yourself. A Past Grand Noble chance. But you crapped out on it and lost the dice.” (228) という言葉の意味と同じである。確かに Jim の側から見ると、Royster の主張は正しい。しかし、それだけ読者に Jim の視点を、最初にも分析したように、固定させることに成功していると言えるのだろうが、問題は Arvay が行動に出なかったことではなく、出られなかったというところにある。夫が苦しんでいるところを彼女（妻）が助けるというこ

とは、従属的に女の役割を果たしていることになるように見えるかも知れないので、彼女はその行動をとるべきだったと思えるかも知れない。しかし、今まで見てきたように、女性は男性に対して、男性性を高める形でしか対処することを許されていないのだ。この視点からすると、蛇に殺されかけている彼を助けるということは、必ずしも彼を支えることにならないのである。その理由は、彼は蛇を使うことで自分の男らしさを示そうとした訳で、その蛇に殺されかけている彼を助けることは、彼の男らしさを高めるところか、逆に彼の男らしさを損なわせることに手を貸すことになるからだ。これは重要な点だが、蛇から彼を助けることで、彼女の方が蛇以上に、即ち、彼以上に、強いということを示すことになりかねない。だから、彼を救った場合の結果は、救わなかった時以上に厳しい反応が予想される。このため、助け出さなかったことで、彼女は無能で依存的女というステレオタイプであり続けたのである。しかし、助けたとしても、助けなかったとしても、彼女にとって、女としての生き方を変えられる状況にはなく、結局は男らしさを支える為の存在でしかなく、自分を駄目な存在として認識する方向性は強められる仕組みになっているのだ。

Arvey が自分を駄目な女として認識する出発点は Carl との関係にある。彼から Jim に相手を変えたことで、彼女の中に自分を否定する場面が描かれる。それ以降は、強姦されたにも拘わらず、それを“mercy”と感じたり、Jim に対して罪悪感を感じたりすることも自己否定を Arvey が行っている姿なのである。そして、その後も継続的に続く自己否定の繰り返しによって、男性性を高めることに大きな役割を果たしている。結局、女性のステレオタイプに従って男性に従順に振る舞うことによって、Arvey の中には自己否定的生き方が強まり、読者にはその Arvey の生き方が強く印象づけられる。その印象は Jim の有能さを際立たせ、男性支配の構図は堅固になる。更に、ステレオタイプ、それに自己否定が連動し強まる関係の中で、Arvey の疎外感は高まり、実質的な現実との接触が少なくなり、現実感を失って行く。“The two men had made a date to talk, but the inning went over Arvey's head.” (160) という比喩表現からも分かるように、自分が社会から疎外されていることを認識し、現実との接触より、現実を避ける方向に向かわざるを得なくなる。ここで注意が必要なことは、結果的に現実には適合しなくなった Arvey の単なる姿ではなく、現実には適合出来ないように仕向けられていた結果として、適合しない道を選ぶしかなかったということである。適合すれば、彼女の自己否定の繰り返しに歯止めがかけられるからだ。歯止めがかかれば、Arvey は弱い女という強い男を際立たせる存在ではなくなるのだ。こうして、益々、男性中心的基準の中で生きる度合いが強まり、彼女が置かれる状況は悪化の度を増すという悪循環になっている。

## V Sawley の 魂

*Seraph* に対する批判は、既に説明したように、一つは白人に同化的作品だということだ。白人を主人公にした作品にしたため、黒人を主人公にした場合に黒人の主人公達が辿り着いた黒人の拠り所である、黒人の中に歴史を越えて流れているアフリカ性というようなものがなくなり、結局、白人の主人公はどこにも到達出来なくなっているという批判である。

即ち、批判のポイントは白人を主人公にしたということと、白人を主人公にして葛藤させた末、開眼させようとしたが、開眼を支えるものがない為に、白人の主人公は自虐的結末になっているということだ。これは、一つには Hurston の作家としての取り組み方に疑念が示されたのだといえる。黒人作家であるのに、白人を描くことは、白人に従属的に生きることと同じで、一個の人間として、自己否定の道を選び、文学的意味で奴隷と化したのではないかという見方である。後者の方は、作家としての技量が問題にされていると言える。今までの黒人の主人公にさせたことと同じことを白人の主人公にも行わせようとしたが、成し得なかったということである。このような批判は人種の支配を意識して、白人そのものへの批判的意識を持っていることだが、結局、支えるものがないような白人を使ったことへの、支えるものがないにも拘わらず開眼させるようとした Hurston という作家への疑念を示しているのである。このような批判を考える時、Sawley をどのように Arvay が捉え直しているかの読みがポイントとなる。

Arvay の基本的問題は、劣等感にしても、女というステレオタイプを演じること、あるいは演じさせられることにしても、彼女の中に自分を駄目な存在として捉えることになっていることだった。彼女が自分に自信を抱くことは、ある一定の時まで、Kenny の音楽の才能が自分の血を受け継いでいると考える時以外、殆どない。poor white として、キリスト教徒として、南部人として劣等感を持ち、女としても、妻としても、母としても、全て彼女を否定する要因だった。だから、駄目な人間としてしか自分を捉えることがなかった。それは彼女が “Maybe he was not as bad off as she had thought she was.” [my underlines] (262) と言っている言葉が正確に物語っている。

駄目だと思っていた自分にも良い面があるということ、即ち、自己否定からの脱出が Arvay を変えていくのである。自己否定の出発点が Carl との関係にあったように、Larraine を含む Carl との関わりの中で、Arvay は自己否定から自己肯定の方向に向かうきっかけをつかむ。母の死を前にして Sawley に帰郷した Arvay は、Carl の醜さ、弱さを知ることになる。彼は牧師としての信頼を失い、母 Maria の葬式にも一銭も出そうとしない上に、1000ドルを

母の家で怪我をしたということで、慰謝料として要求する程である。ここで大切なことは、かって Arvey が自己否定を感じる要因の一つとしてあった poor white の状況を Carl を通して再現する形で Arvey の前に突きつけているということだ。かつての自分と同じ poor white の状況にある Carl が、金銭的に成功している Arvey や Jim に対して、嫉妬心を持っていることに気付くのだ。以前は素晴らしい人だと思われていたし、実際、牧師として尊敬を集めていた Carl が、自分を惨めな存在と考え、かつての自分を忘れ、自己否定的になっているのである。その時の状況を Arvey は次のように分析する。

Larraine whom she had always looked upon as so self satisfied feeling so frail of her chances that she needed to steal herself a husband from Arvey. Then both Carl and Larraine felt themselves less than she was. Maybe there were a lot of weak feeling folks in the world. Weak as she herself was, it was strange to know that people had been depending on her. They must believe that she could hover them. (260)

人間の本質を知ったということである。誰も人間は弱さを持っているものだ、人間とは誰も弱いものだということである。こう考えることで、自分は弱い駄目な女だという自己否定の気持ちから彼女は解放される方向に向かうのである。みんな人間とは弱い存在だと考えることが出来たことと、自分に Carl や Larraine が頼ろうとしていたということは、自分は彼らより弱い存在ではないのだと分かったことから、彼女は今まで持てなかった自信を持つことが出来るようになって来ているのである。

Arvey の自己否定からの脱出の兆しは、その後確認出来るように描かれている。Sawley から帰って来た彼女は Jim にそこであったことを全て話すが、Carl や Larraine のことを悪くは言わない。かつての自己否定に陥っていた彼女と違って、他者と自分を比べることで自分を惨めな存在と考える志向の仕方をしていないということである。その時起こっていることを冷静に、客観的に見ようとする態度が、彼女に出てきた証拠であり、貧しさと豊かさといった対立構造での志向をしなくなっていることを物語っている。

Arvey が Jim と Sawley を出た後持つ苦しみは、所属感のなさから来ていたと言える。彼女の変化のきっかけは、Schmidt が “The turning point of this novel is Arvey’s journey back home to visit her mother’s death-bed.” (218) と言っているように、Sawley に帰る時である。Carter-Sigglow は Sawley に帰ることについて次のように言う。

The wheel has come full circle; largely single-handed Hurston established the



legitimacy of Black rural culture and now rural Whites are to be denied a culture of their own. Arvey most certainly has her own culture which she sentimentalizes whenever she is unable to hold her own against her husband—the scion of impoverished gentry .... (139)

Carter-Sigglow の Sawley の捉え方は、Arvey の再生を考えて行く時は参考になる。それは、今までの Hurston の作品を振り返って見ると、結果的に ethnic な終着点に到達しているが、*Moses* で典型的に示されているように、結局は個人の心の問題だという態度が第一条件として、いつも考えられているからである。

Arvey は Jim と生まれ故郷の Sawley を出て行くが、本当は Sawley を捨てたのだろうか。Sawley を出る前の Sawley への Arvey の気持ちを表しているところで、次のようなところがある。

They [the Sawley people] did not suspect that the general preference for Lorraine, Arvey's more robust and aggressive sister, had done something to Arvey's soul across the years. [my underline] (8)

Arvey の Sawley の人々に対する不信感のようなものが窺える。人々は彼女の細やかな心の動きに気を配ってくれることはなかったのである。Sawley という場所は、彼女にとって心を和らげてくれる場所ではなかったように思える。Citabelle に行っても彼女は “... didn't belong where she was. Jim was a Meserve. Angeline was a Meserve. Kenny was a Meserve, but so far as they were concerned, she was still a Henson.” (174) とあるように、疎外感を感じていた。

母の死を前にして Sawley に帰る Arvey は、Hurston が久しぶりに folklore の収集の為に Eatonville に戻った時に感じたのと同じように、安住の地ではないと感じているように見える。しかし、ここで注意しなければならないことは、上で引用した結婚前も、今回帰郷した時も、Arvey が心をうまく通い合わせることが出来ないのはその人々だということである。Sawley という場所に対して彼女は心を閉じようとしているのではないということだ。次の引用を見てみるとそれが更によく分かる。

.... He [Jim] says folks makes a bad mistake when they call places slums. He says folks are the slums instead of the places they live in. Places don't get nasty and

dirty and low-down unless some folks make 'em like that. Place some folks in what is called slums and they'll soon make things look like a mansion. Place a slum in a mansion and he'll soon have it looking just as bad as he do. It ain't right to blame it on the place. Leave land alone by itself, and it'll grow up into trees and flowers. It don't grow up into slouchy people. [my underlines] (267-68)

今そこに住む人間を、人間の心を、問題にしているのであって、Sawley という地そのものを否定しようとしている訳ではない。だから Pastor (56) の言うように Sawley という Arvay の過去と決別しようとしているという読み方では曖昧なのである。この問題を考える時、Arvay は家は燃やすが何故 mulberry tree は燃やさないのかを分析することが適切な解釈をするかどうかを左右する。家を燃やすことに関して Howard (143) は、主従の関係ではなく、夫と同じ視点に立てるようになったと言っている。Howard の「視点」(viewpoint) という語は曖昧だが、今までの劣等感、自己否定を乗り越えて、夫と同じ立場に立ったとするなら適切な解釈と言えるが、夫と同じ男中心主義的視点に同意したとするなら、その解釈には問題があるだろう。家について、作品では “had caught a distemper from the people who had lived in it, and then diseased up people.” (269) と表現されている。これから、家そのものは元々は問題なかったが、人間が駄目にしてしまい、人間の病に冒された家は、今度はそこに住む人間を駄目にしていくということである。問題の焦点は家より、そこに住む人間に置かれていることに注意を払わなければならない。だから家を燃やすということは、象徴的な意味を持っているのである。その意味が次の引用に説明されている。

Seeing it [house] from the meaning of the tree it was no house at all. It was an evil, ill-deformed monstropolous accumulation of time and scum. It had soaked in so much of doing-without, of soul-starvation, of brutish vacancy of aim, of absent dreams, envy of trifles, ambitions for littleness, smothered cries and trampled love, that it was a sanctuary of tiny and sanctioned vices. Its walls were smoked over with the vapors from dead souls like smoky kerosene lamps ....

... but still, its [house's] fumes and vapors had stuck to her sufficiently to scar Jim and bruise her children. There was no getting away from it. It was a fact in truth. (269)

家のことを poor white の心の歪みを象徴していると捉えていることが分かる。また、Carl や

Larraine によって強く歪められたということもあるが、Arvey の中にも同じ歪みが存在していたという認識をしていることも見落としてはならない。だから家を燃やすということは、ノアの洪水のように、心の歪みを取り除くこと、具体的には自己否定を引き起こしていたものを取り除くことになるのだ。その為、家を燃やした後 Arvey は “felt that she had come to a dead and absolute rest” (270) とあるように、心の解放感を抱いている。即ち、今までの説明の仕方に則れば、“divided in her mind” (270) と表現されているのと同じ意味の double consciousness (二重意識構造) から解放されたのである<sup>7)</sup>。

繰り返すが、Arvey は「心の貧しさ」を捨てたのであって、Sawley を捨てたのではない。これは mulberry tree を切り倒したり、燃やしたりしないことから説明がつく。Arvey の眼にする木は2月末ということもあって、葉も全て落ち、数週間後には青い芽が吹き始めるという象徴的な設定になっている。即ち、厳しい状況を乗り越えて、新たな芽を出す mulberry tree を使うことで、Arvey の再生を、自己回復を暗示しようとしている<sup>8)</sup>。

... she does repudiate her background and a way of life that seem to her degrading, and ultimately evil .... It is her vision of the Cracker's poverty-stricken existence that becomes a determining factor in her awakening. Face with the unbearable economic constraints. Arvey is led to contemplate herself in a new light. (219)

mulberry tree は彼女が「女」として生きること、即ち、人間として生きること始めたところなのである。Carl が彼女を女として認めていなかった（と思っていた）が、Jim が、強姦に近い形であったことには問題が残るが、彼女を女として受け入れた、即ち、人間として受け入れたところなのだ<sup>9)</sup>。この意味で mulberry tree は、彼女にとって人間として生きていく出発点なのである。Jim との初めての肉体関係の後、人生の苦難の中で、自らを否定する生き方をしてきたという認識が mulberry tree の木の下に立つことで生まれてきて、その生き方は自分の心の問題だったということに気付いてくる。“... she could use it like a badge and pin it like a bouquet over her heart.” (269) という表現からも分かるように、自分の心の持ち様が大切に、自分のことを自分がどのように捉えるかということが重要だと認識してきたのである。こうして Arvey は、Hurston が Eatonville を男中心の、母を苦しめた、脱出の対象として否定的場所として捉えていたことから、自分自身を造った場所として受容していったように、Sawley という場所を、自分の人生の出発点という観念的な形で、受容していくのである。

しかし、Sawley には Hurston にとって Eatonville の様に、黒人文化の原点のような明確な identity に繋がるものがない。Sawley の精神といっても、それが明確に示されていないこ

とは事実だ。だから Wall が “the inner resources that would permit her to claim autonomy ...” に欠けている為, “... cannot achieve selfhood through a profound engagement with an expressive culture, because she has not culture to engage.” (185) という文化的源がない為, 結局は拠り所となることがなくなると言っているのである。確かに, 具象的 roots の提示がなされていないし, Sawley を通してみても Arvey と彼女の identity との関連性が弱く, 本当の心の安らぎが得られるのだろうかという気持ちになる点では, 読者に迷いを生じさせることは事実だ。

しかし, *Seraph* の狙いは, 即ち, Hurston の狙いは, 主人公の心の問題であって, ethnic に問題を括って探求しようとする方向性はないのだ。Hurston が Douglass Gilbert におくった手紙の結論部分では次のように言っている。

As for me, I prefer to leave it [racial angle] to the sociologists. As I said, I view life through the eyes of a person, not a Negro. I shall continue my studies and my writing on that basis.” (Hemenway, xxxi)

また, *Dust* の中でも “..., we are no race. We are just a collection of people who overslept our time and got caught in the draft. (306)” と言って, ethnic に問題を括る関心が執筆する時なかったことを証言している。だから白人同化的作品とする, 例えば Rambeau の “This acceptance of an [white] aesthetic” (64) という主張に見られるように, 白人に焦点を当てて描こうとしているという見方や自分への評価を高め収入を増やすために白人を描いたとする Meisenhelder (80) の見方は的外れの批評と言わなければならない。

## Ⅵ 母 という 役

Feminism 批評にとって, 全体的に性的ステレオタイプに苦しんでいるように見えながら, Arvey が最後にとる Jim に対する従順と思える態度, 即ち, 女というステレオタイプを受け入れているかのように思える場面に接したところで, feminism の作品としては読みにくくなる。例えば, Plant が, “The difficulty for a feminist reading of *Seraph* is that *Seraph* is not a feminist text .... There is little in *Seraph* that can be appropriated to the feminist-womanist discourse.” (168-69) と言っている程である。勿論, 反語的意味で Arvey の最後の従順と思える態度を読んで, “a satire portrayal of white women” と読む Barbara Smith (30) もいるが, 彼女も最後の Arvey の態度は従順な女のステレオタイプを演じているところ

と見ていることに変わりはない。

白人同化的作品と読む場合も同じだが、男性中心主義に屈服したという読み方をしている場合も、共に Hurston が作家として今までとって来た態度と異なっているという立場に立って読まれているということに注目する必要がある。Hurston が黒人的良さを捨てたのかという見方と同じように、女として男に結局は屈服する道を選んだのかという見方をしているのである。果たして Hurston は今までの理念を捨てて、男性中心主義に屈服したのだろうか。ここではこのことを中心に見ていく。

作品中、Arvey は結局男に隷属する道を選ぶことで、性差別に屈したのかということで、問題になる箇所は以下のようなところである。

Jim was hers and it was her privilege to serve him. To keep on like that in happiness and peace until they died together, giving Jim the hovering that he needed .... Yes, she was doing what the big light had told her to do. She was serving and meant to serve. She made the sun welcome to come on in, then snuggled down again beside her husband. (311)

これに対して Wall は、“is able to achieve an identity only by accepting a subordinate role as his life” (185) として、妻としての従属的役割を彼女が受け入れたと言い、Schmidt は“... *Seraph on the Suwanee* discloses Arvey's failure to evolve a personal criteria of self-worth, a failure that is a direct outgrowth of the familial, social and economic pressures that, throughout her life, affect discernment and her perceptions of herself.” (203) として最後の場面は Arvey の敗北と見て、poor white 的状況から抜け出せなかった為に従属的にならざるを得なかったと見ている。

反対に St. Clair は最後に Arvey は自由を得ると読んでいる。

Because she is consistently denied access to the power of both word and deed, her progress is slow. But in the end she finds freedom, meaning, a sense of community, and the potential for continued growth in her discovery of an active, inclusive, unconditional love. In final refusing passively to allow people to take from her and instead deciding freely to give, she claims the confidence, power, and self-respect that nourish her determination and ability to shape her own place, locate her own authority, and direct her own way. (38-39)

特に Jim に対しては “the value of her chosen role as nurturer” (56) とあるように “nurturer” という言葉を使い、「母」(mothering) という役割を自覚したことを強調している。新生の Arvey を肯定的に見るか否定的に見るかは、この “mothering” の解釈の仕方にかかってくる。

Howard は “By the end of the novel, their [Jim’s and Arvey’s] views are the same because Arvey has come to accept her role as mother” (145-46) と言い, “mothering” を Jim が考えるような「子供を育てる母」に限定して捉えている。McDowell もほぼ同じで, “‘rebirth’ is actually a regression to a former life of servitude” (177) と言い, “mothering” を再生前の「子供を育てるだけの母」として読んでいる。Plant (169) も女の役割の面でも伝統的な主従の関係を受け入れたと分析している。Rayson (9) は説明不足のところがあるが, “mothering” に別な捉え方を付加しようとして, Hurston の世界では女性は男性との関連の中で生きている為, 男性と比べる女性は不安定感が強くなる。そういった女性の不安定感を乗り越えるために sexuality が武器になりうると言う考え方を Hurston はしている。その為, 性的に成熟することで, 女性は男性と同等の立場に立って, それまでの不安定感を乗り越える可能性が出てくるのだという分析をしている。この Rayson の読み方は, “mothering” と同じ意味で作品の中で使われている “Holy Mary” という表現をどう読むかの示唆を与えてくれる。

Jim という夫に対して, Arvey が果たすべき役割として新たに認識したのは “Holy Mary” 的役割であって, 単に「子供を育てる母」だけの「母」という限定的なものではない。その部分を作品から抜き出してみる。

Her job was mothering. What more could any woman want and need? No matter how much money they had or learning, or high family, they couldn’t do a bit more mothering and hovering than she could. Holy Mary, who had been blessed to mother Jesus had been no better off than she was. (310-11)

「母」という新しい定義が, 単に子供を育て, 料理を造って, 家を守るという限定的な母ではなく, 全てのものを包括する, 包容力のある, いわば「母なる自然」のような人間を包み込むような力を持った存在だと言える。

Arvey のこのような新しい認識は, 従来の限定的ではあるが, 「子供の母」として充分自分が役割を果たしていたという自信から出発している。死に近い母 Maria を見舞った時, Maria は子供達を立派に育ててきた Arvey が, 母親として誇りを持っていいという暗示を,

“Your chillun’s got plenty soul and heart in ’em, Arvie.” (246) という言葉で示すのである。母親として充分自信の持てることをして来たという気持ちをこの時 Arvey は持てた筈だ。即ち、伝統的な「母」という役割に対して、否定的にではなく、肯定的に捉える方向性が、新たな「母」の定義に向かう前提になっている。これに加えて、Jim と Fast Mary が怪しい関係になりかけた時に、Jim の妻であることに誇りを示す発言をするところがある。これは一見、彼女が男に付属する役割として妻を捉えているかのように見えるかも知れないが、妻という役割を否定的意味ではなく、肯定的且つ積極的な意味で捉えようとしている証なのである。彼女の進もうとしている方向は、かつて黒人がにたにたしているとか、論理的でないという否定的ステレオタイプで括られたことそのことを、情緒豊かで、感受性の強い、良い面として捉え直すことで力を得ていったのと同じ方向性なのである。例えば、“Sweat” では洗濯女をしている Delia の洗濯は、洗濯しか出来ないという否定的捉え方ではなく、洗濯が出来ることが一つの彼女の力になって、Sykes に勝利するという肯定的な捉え方がされている。

自分の果たして来たことを否定的にではなく、女として今まで否定されていた立場を一つの自分の良さという武器として、心の中に備え持つことが出来るように Arvey はなる。Holtの言う “sense of self-worth” (266) への目覚めなのである。Arvey の到達した新しい彼女の認識を示す場面がある。

Jim was ... trembling all over his body like a child trying to keep from crying. Like a little boy who had fled in out of the dark to the comfort of his mother. After a while, Jim sighed deeply, and his head slid down and snuggled on her breast. From long habit, Arvey’s fingers began to play through his hair in a gentle way. Almost immediately, Jim sighed and went off into a deep and peaceful sleep. (308-09)

Jim という存在は、今までは神のような存在であった。だからこそ、彼女は自分を弱い存在と認めることで彼の強さに依存して生きる道を選んできた。それでも Arvey は Jim の弱さ故の強がった言動だったと分かっても、そういう彼を受け入れようとしている。これは feminism 的視点で言うと、彼女は自分を捨てて、結局 Jim に隷属する道を選んだことになり、敗北したのだということになるかも知れないが、Hurston の狙いはそこにはない。Arvey は Jim の奴隷になったように見えても、実は彼の弱さを優しく包み込む母のような包容力を示すことで、彼に対して従属的な立場ではなく、彼より一周りも二周りも大きな存在としての立場に立っているのである。その立場こそ、男にはなり得ない、女のみなり得る「母」なのである。だから彼女の新たな認識として、“All that had happened to her, good or bad, was a part of her

own self and had come out of her.” (309) と表現されているのだ<sup>10)</sup>。

自分の立場を捉え直すことで、Arvay の中に存在感が生まれてくるのは当然である。また、存在感が生まれてくると、生きているという現実感も生まれ来るし、現実生活にコミット出来るようになって来る。だから、Arvay は作品の中で初めて、Jim と仕事場で行動を共に出来るようになるのだ。彼女が自分の行動に自信が持てるようになった証しなのだ。

Hemenway は自信は生まれていないと読んでいて、“... *Seraph on the Suwanee* fails precisely because Zora seems incapable of moving Arvay from fear into self-confidence.” (313) と言っている。Hemenway がこの見方をする理由は、既述した「母」としての役割の捉え方に違いがあるからだ。Hemenway は「母」という役を受け入れることは、Jim より劣っていると認めることになると考えているからである。しかし、それでは何故 Arvay は「母」として Jim を何度も“little boy”と形容しているかということは彼の念頭にないようである。McDowell (171) も同じように Arvay は自信を得ることが出来なかった為に、自由にはなれなかったと読んでいる。彼女は作品中 Arvay が自由を求めていると言うことがテーマであることは分かるが、自由の為には自信の確保が必要だ。ところが、その自信の確保がうまく行っていないとして“the protagonist fails to develop the necessary self-confidence to secure that freedom”と言っている。

しかし、次の引用を見ると Arvay に自信が生まれていて、結果を恐れず行動する決意が出来ていることが分かる。

Arvay was determined to trot out the best horse she had in her stable, to never turn her back on the enemy, and if she lost, not to go off crying.

A great freedom and calm came to Arvay with her determination. Nothing ahead of her but war, and she was ready and eager for it to start .... This was all hers until death if only she had the courage and the strength to hold it, and that she meant to do. (304)

これに加えて、その行動の決意がいかに固いものかという認識の為に、Jim と一緒に漁に出かけさせた際、難局に遭遇させ、それに立ち向かわせてもいる。更に、構造的にも Arvay の自信回復の暗示の為に、Brown が“it is only in the last 40 pages of the novel, when Arvay’s re-education is completed, that the implied author ‘retires’ completely.” (157) と指摘するように、最後は完全に Arvay 中心の、Arvay の視点による展開になっているのである。



## Ⅶ 共存を求めて

Arvay は自分のことを弱い存在としてしか見ていなかったのと同じ構図で、Jim のことを強い存在としてしか見ていなかった。彼女が弱い故に、彼は強く見え、彼を強い存在と見るから、自分のことを一層弱く見るという悪循環にあった。即ち、弱者が更に弱者を捜し出すことによって、自分を強い存在として自認したいと思う逆の意識構造で、自分の良さを認めていない黒人が白人を眼の前にして白人の強さを自覚し、自分の弱さを自認した歴史があるように、強い者を見ることで自分の弱さを自認し、自己否定を強めて、自虐的になっていたのだ。

ところが、強いと思っていた Jim の内面に弱さを見出すことによって、人間はみな弱さを持っているという認識を持つようになる。まず、Jim の内面的弱さを認識する場面を見てみよう。

It was funny that she had never known Jim in full until this night. Jim was not the over-powering general that she had took him for. Oh, he had that way with other folks and things. No matter of doubt about. From a teppentime shack to his own fleet on the ocean was a long, long road to travel. But that was the outside Jim. Inside he was nothing but a little boy to take care of, and he hungered for her hovering. Look at him now! Snuggled down and clutching onto her like Kenny when he wore diapers. Arvay felt such a swelling to protect and comfort Jim that tears came up in her eyes. So helpless sleeping there in her arms and trusting himself to her. (310)

Jim は確かに外見では支配的で強かった。だから、Arvay は “... a woman saved ... by the whole hearted affection of a real man” (Brickell, 19) のように Jim を本物の男で、彼の心からの愛情によって救われるし、Jim は “Jehovah” (Brickell, 19) の役をしているという見方をしたくなる所だ。しかし、彼の内面は子供のような弱さを持っていることに Arvay は気付くのだ。こう考えると、Jim の今までの強者ぶる言動に納得が行く。内面的に弱さを持っているが故に、強がって見せ、弱い者を見つけ出すことによって、自分を強い存在として認識したいという意識構造があったのである。例えば、蛇の場面にしても、彼は自分の強さを Arvay の示す蛇への恐怖心によって高めたかったものと思える。また Kenny がフットボールの試合に出た後のパーティーで、パーティーが厭で家に連れて帰ってくれと強行に言い張る

Arvey に屈して、車で連れて帰る時、猛スピードで車を走らせ、Arvey の恐怖を誘う時や、家に帰って Arvey に大声で怒鳴ったり服を脱がせることを強制することも、Arvey をコントロールできなかった Jim は、弱さを実感しているが故に強さを示さなければならないという気持ちになっているのだ。

ここで大切なことは、Arvey が自分は思ったより弱い存在ではないとか、Jim や周りの強いと思っていた人達が思ったより弱さを持っていると認識しても、いたずらに自分の強さや他の人達の弱さを強調していないところである。ここが彼女が大きく成長した部分でもあり、Hurstons の強調したいところでもある。

Arvey は弱さを自認する存在ではあったが、結局は弱者対強者という対極構造を以前は持っていた。それが彼女の苦しみを強めることになっていた。今の Arvey は、自分は特別に劣った存在ではないと思いながら “it was her privilege to serve him .... She was serving and meant to serve.” (311) と、今までの Jim に仕える自分の生活は続けようと考えている。また、同時に、St. Clair が “She is utterly uninterested in changing Jim.” (55) と言っているように、Jim を変えようとも考えていない。これは同じように軋轢があった Carl や Lorraine との関係についても言えることである。

Arvey had had a good sleep and sat up in bed at peace and agreement with the world. She was full of resolution. She was willing to take the blame for any variance with Lorraine and Carl and shoulder the job of straightening things out. (262)

これらのことから、Arvey の中に、いわゆる競争の論理で相手を捉えまいとするところが生まれていることが分かる。

Arvey が対極構造という枠組みで Jim との関係を捉えなくなっていることは、Jim との一体感が抱けるようになっていっていることに表されている。このことは象徴的には二人が一緒に漁に出て、船を進ませている時に起きている。潮の満ち具合が足りない内に他の船に負けない為にも、自分の船を進めようとする Jim に対して、これ以上進ませると船が転覆してはいけないと、他の船員が Jim を止めようとする。それを見た Arvey は船室から飛び出して来て、その男が Jim を止めることをやめさせ、Jim が船を進ませることに手を貸すところがある。この場面は、Jim が蛇に巻き付かれた時の場面を意識して書いた場面のように思える。蛇の事件の時、彼女はこのような行動が取れなかった。弱者対強者の意識構造の中にあり、弱者でい続けようとしていたからである。その意識を脱している彼女は Jim に手を貸すことが出来、“Jim acted calm, but Arvey could feel the excitement in him just the same.” (289) とあるよう

に、それが一体感の実践にもなるのである。

ここで大切なことは、Plant の言うような “androgynous spirit” (179) で一体感が得られるという読みかをしなない方がいいということである。これは、いわゆる男女の違いをなくすることが男女の良好な関係を生むという考え方であり、決して不当な見方とは言えない。しかし、Hurston の考えている男女の共存は、男女の違いは違いとして認めた上で、男は男にしか出せない良さを、女は女にしか出来ない良さを求め、実践し、お互いにその良さを認め合うことによって共存がはかれるという考え方に立っている。確かに、*Their Eyes* では Janie と Tea Cake は androgynous になって行ったという読み方も可能であろうが、*Seraph* では、漁に出る二人を待っている現実には、androgynous になり得ないことがあるということを示している。事実、荒波の中で、男達は悪戦苦闘している時、Arvay は船室に籠もっているしかないのである。一体感とは対等な意識構造の上に成り立つわけで、必ずしも男女の違いが少なくなる必要はなく、男は男としての自信、女は女としての自信を持つことで意識的に対等な関係を構築し、それにより、共に支え合う、相互依存の形で共存が可能になってくる。

androgyny 的考え方が何故 Hurston になく、何故危険性を孕んでいるかという点、この考え方を推し進めて行くと、結局は、いわゆる個性を失い、画一的な、別の形でのステレオタイプを造り出すことになるからだ。このことで、また同じ苦しみを繰り返すことになるのである。*Their Eyes* の最後の場面で Janie が経験したことを Pheoby に話し終えて、直ぐに宿泊場所に行ってしまうところはよく議論の対象になるところだが、Hurston の狙いは、成長した Janie の考え方を親友の Pheoby に話しはするが、その後その話をどのように解釈するかは Pheoby 次第だということである。Janie は決して自分と Pheoby の間に画一性を成立させようとはしていないのだ。

このような考え方を支えているのは、Hurston の他の作品にも見られるように、物事や人々を「あるがまま」に受け止めようとする基本的態度である。St. Clair も同じ内容のことを言っている。

She is utterly uninterested in changing Jim; accepting him as he is, she strives only after her own growth and happiness, trusting that her efforts will lead naturally to the well-being of others. (55)

Arvay は Jim の良さは良さとして認めようとしているのだ。そのことがはっきりと示されているところを見てみよう。

Jim was sitting on the hatch cover and looking as male as a coconut tree. What woman wouldn't be glad to get hold of a man like that? The tiny lines from the outside corners of his eyes, and around his mouth took nothing away from his looks and appeal in Arvay's eyes. Naturally, all the other females on earth were bound to see his wonders. They could not help themselves. (299-300)

feminism 的視点からすると、いわゆる macho な男に惹かれることは否定的に捉えられる為、Arvay のここでの発言には賛成することが出来ないところだろう。しかし、ここで注意して読む必要があることは、どの女も Jimのことを気に入るだろうという言い方をしているところである。Hurstons も sexism や racism によるステレオタイプには反対の態度を取っていた。それは支配者側による造られた、相手を否定する為の一種の手段だったからだ。ここでの Jim に対する Arvay の捉え方は、それとは異なっている。むしろ、良いものは認めようとする態度がある。物事をあるがままに見て、良いと思ったものは認めていこうとする考え方が見られる。こういった態度を持つことで、一括的に拒否していた相手とも繋がりを持つ可能性が生まれて来るのである。

「あるがまま」に受け止めるという考え方が Arvay に生まれてきた為に、彼女の心の受容力が広がって来ていることがいくつかのことによって示されている。例えば、彼女は今まで黒人の Jeff と Janie 夫妻に対して好意的ではなかったが、今や二人の良さを見出し、それを彼らとして認めて行こうとしているし、エビ漁の船長が黒人であったり、乗組員に黒人が混じっていることに、一度は驚きを示しながらも、“... learned that it was a common thing. There were as many if not more colored captains than white.” (284) とあるように、それを直ぐに理解し、拒否反応を示すことはない。

It admits the brotherhood of men as Black, Spanish, and American sea captains greet each other with mutual respect. It is into this world that Arvay is reborn a thinking, acting human being who has been purified and freed of guilt complexes, psychological frustrations, demeaning social customs and prejudices. (148)

相手を「あるがまま」に受け止めるということを、単に Jim や Arvay に近い周辺にいた黒人だけに限定するのではなく、漁業場という更に広い世界に Arvay を引き出すことで、その適応範囲を広げて考えさせることを狙っている。また、このことは雨水が川になり、川の水が海になるというメタファーからも分かるように、人間全てに通じることで、「あるがまま」に

相手を受け入れることで、全ての人間の共存が可能になるという広がりを持たせようとしているのだ。

このような人間全体の共存を Hurston が視野に入れていたことは、既に *Dust* の最後の部分で示されている。

I have no race prejudice of any kind. My kinfolks, and my “skin-folks” are dearly loved. My own circumference of everyday life is there. But I see their same virtues and vices everywhere I look. So I give you all my right hand of fellowship and love, and hope for the same from you. In my eyesight, you lose nothing by not looking just like me. I will remember you all in my good thoughts, and I ask you kindly to do the same for me. Not only just me. You, who play the zig-zag lightning of power over the world, with the grumbling thunder in your wake, think kindly of those who walk in humble places, think kindly too, of others .... Maybe all of us who do not have the good fortune to meet, or meet again, in this world, will meet at a barbecue. (209)

この *Dust* の “a barbecue” に似たイメージの場面が *Seraph* でも使われている。それは Arvay が Jeff と Janie と一緒に Jim に会いに行く準備をしている時の場面で、三人で出かけることをバーベキューパーティーならぬ、ピクニックにでも行くかのようににはしゃいだ気持ちに Arvay はなっている。そのような中での彼女と Janie や Jeff との関係には対等な協力関係が見られるのである。この三人の関係の先に人間全体を対象にした視野があることを認めることは容易である。

人間全体を考える時、個人個人の心が問題になって来る。一人一人は外見とは無関係に、様々な心の持ち方をする。だからこそ、人間の心の持ち様を考えることが大切になるのである。

In *Seraph on the Suwanee* we have an individual whose reasons for doing “such-and-so” have little to do with the color of her skin and everything to do with the state of her mind, a poor image of self, and a chauvinistic, though extremely loving husband. (Howard, 134)

*Moses* の中で Moses は最後に次のように言う。

Freedom was something internal .... All you could do was to give the opportunity for

freedom and the man himself must make his own emancipation. (344-45)

*Seraph* でも Hurston は同じスタンスで作品を書いていると言える。人間の心の貧しさ、不自由さを造り出すのは、その人自身であり、その人の心が豊かになり、自由になれるかどうかはその人自身にかかっているという考え方である。

その為には、相手があるがままに認め、自分の考えを押しつけることがあってはならないのだ。Arvey は Hurston の他の作品の主人公と同じように、自らの束縛を自らが解き放ち、自由になった。自由になり得たからこそ、依然として男性中心主義的発言をする Jim に対しても、離れて観察する形で、相手をしている。この時の彼女は被支配者的ではなく、客観的視点を持った傍観者的立場を取っているのだ。自分の夫でも、彼の心を変え得るのは彼自身だからだ。

## VIII お わ り に

Hurston の *Seraph* はある意味では議論の少ない作品であり、別の意味では議論の多い作品である。この作品が外見的には Hurston の今までの作品と全く異なっているかのように見えるからだ。poor white の世界を中心にした作品は読者に戸惑いを与え、今までの Hurston はどうしたのか、黒人文化の代弁者とまで言われた彼女は黒人文化を捨てて、白人文化に迎合したのか。このような意見は、彼女の実生活や作品が白人に対して好意的で、黒人に対して厳しいという従来からの見方に支えられている。白人に同化的とする見方は、この時代の黒人作家の作品の同化的傾向を受けてのことだった。白人寄りと見られるこの作品は議論の対象から徐々に外れて行くことになったのだ。第2に、black feminist の先達の捉え方をされていたにも拘わらず、Arvey が最後に男性へ従属することを決意しているかに見える方向性に対する反発があった。伝統的な母や女に戻っているように捉えられた Arvey は、男性中心主義に屈服したという見方をされたという意味では議論の対象になったが、結局はそのような作品は価値がないとして、議論の対象から徐々に外れて行くことになった。

Meisenhelder が “Actually, *Seraph on the Suwanee* is ... an extension of her early depiction of black culture as a positive alternative to the deadly values of white culture.” (79) と言っているように、「初期の作品の延長線上」で考えるべき作品だという点では正しいが、悪い白人文化の代案といった人種的角度は初期の作品にもないし、*Seraph* にもない。読者は使われる題材とそれを描く作家との繋がりを通して、文学及び社会の時代の流れを基に作品を読み、作家を評価してしまいがちだ。確かに Hurston の復活は時代の流れ故に復活し得たと

いう面も持っている。その中で時代の流れを意識し過ぎる批評家によって恣意的に読まれ、本来作家が目指した意図と異なる角度に作品が向けられる<sup>11)</sup> ことも起きてしまう。これは当然のことで、決して不当なことではない。新しい読み方をしていこうとする時、作家を越えて読者が作品を読むことは許されてしかるべきことであるからだ。

しかし、不当な味付けは作家にとって有り難いことではない。Hurston は今までの作品で繰り返し「人間」に自分は関心があると言って来た。その人間の心の中を深く覗き込み、掘り起こすことこそ彼女の最大の関心であったのだ。その為、黒人を対象にすることもあれば、白人を対象にすることもある。黒人文化を賛美することもある。それを形成する大衆を否定的に捉えることもある。白人や黒人に対しても、男性や女性に対しても、同じように否定的に描くこともある。肯定的に描くこともあった。人間には良い面も悪い面もある。だから人間なのだという考え方をしているのだ。そういう人間の「あるがままの姿」を描くことが Hurston の作品なのである。勿論 *Seraph* でもその基本的態度は変わってはいない。

### Notes

1. Spanish moss は Georgia や South Carolina と Florida の州境のあたりから見られる植物で、空中の水分を吸収して他の木の枝にぶら下がり成長する。
2. ここまで説明してきた三つの意識を Howard は次のようにまとめている。

The town of Sawley, its tradition, and Arvay's perception of them are the trouble with Arvay and her marriage. Though Arvay has always seen herself as a "Cracker," she is secretly proud of her heritage and considers it a vantage point from which to look down upon others, mainly blacks, foreigners, and Northerners. She stubbornly clings to the old ways and allows them to wreak havoc with her life. (140)

Arvay の中に古い伝統に囚われる傾向があり、それは劣等感と歪んだ優越感に支えられていたということなのだ。

3. Brown の分析は、目的が異なっていて、Arvay の心の変化、成長という視点で書かれた論文だが、Arvay 中心の場面が初めは少なく、後半に行く程、彼女の出番が多くなることを指摘している点では参考になる。

On the one hand, the implied author clearly defines standard norms—mental health values—from which Arvay should not deviate ....

On the other hand, Arvay tests, in her own life situation, the insights about herself she gains .... For, in order that Arvay become well, in terms of the values of good psychological health set up by the implied author, she must eventually learn to live independently; she must reject the omniscience of the artificer therapist, and he must retire from her life. (54-55)

4. mulberry tree とその周辺は Arvay が子供の頃よく行った場所だが、男性を象徴する世界を暗示している。“... they went along unevenly over clods that had grass grown over them, through patches of broom-straw and down to the back and bottom of the place where the huge mulberry tree stood in swaying majesty” (43-44) とあり、男根を木で、陰毛を草で象徴する描写である。彼女はこういった世界の中に閉じこもっていたということで、それは男性願望を彼女が持っていたということ

を意味している。

5. Royster の Jim の読み方は理解に苦しむ。彼女は Jim のことを chauvinist ではない (140) と言ったり、女性は必ずしも知的に劣っていると Jim は考えていなかったと言う。

... he does not actually believe that woman are intellectually inferior, and, as he discovers that mental and physical inertia is not the unifying trait among women .... (145)

Jim が Arvey を劣ったと見ているところはいくらでもある。

6. “The Gilded” は Joe と Missie May の若い黒人夫婦の話だが、二人にはまだ子供がいない。Missie との結婚に Joe の母は反対していたが、彼女に子供が出来たとなるとその態度も変わるのである。また、Missie と Joe の関係も、Otis という男と Missie との関係で危ない状況だったが、子供を身籠もったということで、二人の関係も改善の方向に向かう。Otis によって Joe の男性性が窮地に立たされていたわけだが、自分の子供が産まれるということで、それを確保出来たのである。

7. Schmidt の次の引用の中で使っている background という語そのものは曖昧な表現であるが、poor white の持つ心の貧しさと決別したという主旨では、彼女の分析は正しい。

... she does repudiate her background and a way of life that seem to her degrading, and ultimately evil .... It is her vision of the Cracker's poverty-stricken existence that becomes a determining factor in her awakening. Face with the unbearable economic constraints. Arvey is led to contemplate herself in a new light. (219)

8. Morris は “By the end, the tree has become a symbol of her strength” (10) として mulberry tree が再生の力になったことを認めているし、Schmidt も “... initiates a rebirth” (221) として、再生を示すものとして読んでいる。

9. 「女」として受け入れられることが何故「人間」として受け入れられることになるのかについては付加的な説明が必要である。「人間」は男と女しかいないので、「男」として、或いは「女」として認められることは、「人間」として認められることだという考え方が基本にある。例えば、奴隷は男としても女としても認められていなかったの、人間としても認められていなかった。Arvey が「女」として認められる方法には問題は残るが、人間への第一歩を切ったと考える。

10. Hamilton はこういう終わり方が不満なようで、状況が変わっていないのに人物に変化を求めていると言っている。

But the novel does not end so well as it begins, not by any means. Instead of having Arvey live out her life in a scarcely mitigated uncertainty and misery—as in real life she would—Miss Hurston undertakes to have her find emotional balance and satisfaction. (355)

しかし、周囲の変化がないことがむしろ大切なのだ。周囲の変化をさせていないのは、Hurston が個人の心を問題にしているからだ。周囲は同じでも個人の心の変化で生き方も変わって来るということを示そうとしているのである。その同じ状況の中で Arvey がどのように気持ちを変えて生きるかということが、Hurston が考えようとしたことだと言える。人間の生き方を決定するのはその人の心の持ち方次第であることは、今までの作品でも繰り返し示されていることである。

11. *Seraph* は批評家の忖意の洗礼を受けた作品と言っていい。既に出てきたように、白人同化的作品とか、反フェミニズム的作品とか、フロイト分析で読める作品といったことがこれをよく物語っている。しかし、勿論、*Seraph* を Hurston の従来の作品に流れる一貫したテーマで捉えることに成功している批評家もいる。例えば、Howard は “As in most of other works ...” (134) と共通したテーマを強調しているし、St. Clair (40) も Cannon (203) も Hurston の基本的態度は変わっていないと指摘している。Turner (113-14) も黒人の話ではないと断っていることだが、初期の作品と同じだと分析している。



## Works Cited

- Bigelow, Gordon E. and Laura V. Monti ed. *Selected Letters of Marjorie Kinnan Rawlings*. University Press of Florida, 1982 (1988).
- Bone, Robert A. *The Negro Novel in America* (Revised Edition). Yale University Press, 1958, 1965 (1970).
- Brickell, Herschel. "A Woman Saved: Review of *Seraph on the Suwanee* by Zora Neale Hurston." *Saturday Review of Literature* (November 6, 1948).
- Brown, Judith Benninger. "Point of View in Zora Neale Hurston's Florida Novels." MA Thesis submitted to the University of Florida, 1968.
- Cannon, Katie Geneva. "Resources for Constructive Ethic for Black Women with Special Attention to the Life and Work of Zora Neale Hurston." Ph.D. Thesis submitted to Union Theological Seminary, 1983. Reprinted by UMI, 1994.
- Carter-Siggrow, Jannet. *Making Her Way with Thunder: A Reappraisal of Zora Neale Hurston's Narrative Art*. Peter Lang Publishing, Inc., 1994.
- Dance, Daryl C. "Zora Neale Hurston." *American Women Writers: Bibliographical Essays*, ed. Maurice Duke et al. Greenwood Press, 1983.
- Ellison, Ralph. *Invisible Man*. Penguin Classics, 1952 (1993).
- Hamilton, Edward. "Review of *Seraph on the Suwanee*." *America* Vol. 80, No. 13 (January 1, 1948).
- Hedden, Woth Tuttle. "Turpentine and Moonshine: Love Conquers Caste Between Florida Crackers and Aristocrats." *New York Herald Tribune Weekly Book Review* (October 10, 1948).
- Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston: A Literary Biography*. University of Illinois Press, 1977 (1980).
- Holt, Elvin. "Zora Neale Hurston." *Fifty Writers After 1900*, eds. Joseph M. Flaura et al. Greenwood Press, 1987.
- Howard, Lillie P. *Zora Neale Hurston*. Twayne Publishers, 1980.
- Hurston, Zora Neale. "Sweat," 1926. *Spunk*, Turtle Island Foundation, 1985.
- . "The Gilded Six-Bits," 1933. *Spunk*.
- . *Jonah's Gourd Vine*, 1934. Virago Press, 1987.
- . *Their Eyes Were Watching God*, 1937. University of Illinois Press, 1991.
- . *Moses, Man of the Mountain*, 1939. University of Illinois Press, 1984.
- . *Dust Tracks on a Road*, 1942. University of Illinois Press, 1984.
- . *Seraph on the Suwanee*, 1948. AMS Press, 1974.
- McDowell, Deborah Edith. "Women on Women: The Black Woman Writer of the Harlem Renaissance." Ph.D. Thesis submitted to Prude University, 1979. Reprinted by UMI, 1988.
- Meisenhelder, Susan. "Hurston's Critique of White Culture in *Seraph on the Suwanee*." *All About Zora*, ed. Alice Morgan Grant. FOUR-G Publishers, 1991.
- Morris, Ann R. and Margaret M. Dunn. "Flora and Fauna in Hurston's Florida Novels." *Zora in Florida*, eds. Steve Glassman and Kathryn Lee Seidel. University of Central Florida Press, 1991.
- Pastor, Maria Dolores. "Social Overtones in the Works of Zora Neale Hurston." MA Thesis submit-

- ted to the University of Florida, 1958.
- Plant, Deborah G. *Everyday Tub Must Sit on Its Own Bottom: The Philosophy and Politics of Zora Neale Hurston*. University of Illinois Press, 1995.
- Porter, A. P. *Jump at de Sun: The Story of Zora Neale Hurston*. Carolrhoda Books, 1992.
- Rambeau, James. "The Fiction of Zora Neale Hurston." *Markham Review* Vol. 5 (summer, 1976).
- Rayson, Ann. "The Novels of Zora Neale Hurston." *Studies in Black Literature* (winter, 1974).
- Royster, Beatrice Horn. "The Ironic Vision of Four Black Women Novelists: A Study of the Novels of Jessie Fauset, Nella Larsen, Zora Neale Hurston, and Ann Petry." Ph. D. Thesis submitted to Emory University, 1975. Reprinted by UMI, 1994.
- Schmidt, Rita Terezinha. "'With My Sword in My Hand.' The Politics of Race and Sex in the Fiction of Zora Neale Hurston." Ph. D. Thesis submitted to the University of Pittsburgh, 1983. Reprinted by UMI, 1986.
- Slaughter, Frank G. "Freud in Turpentine." *New York Times Book Review* (October 31, 1948).
- St. Clair, Janet. "The Courageous Undertow of Zora Neale Hurston's *Seraph on the Suwanee*." *Modern Language Quarterly* (March, 1989).
- Turner, Darwin. *In a Minor Chord: Three Afro-American Writers and Their Search for Identity*. Southern Illinois University Press, 1971.
- Walker, Alice. *In Search of Our Mothers' Gardens*. Harcourt Brace Jovanovich, 1967 (1983).
- Wall, Cheryl. "Zora Neale Hurston" in *African American Writers: Profiles of Their Lives and Works—from the 1700s to the Present*, ed. Valerie Smith et al. Macmillan Publishing Company, 1991 (1993).
- Washington, Mary Helen. "Introduction, Zora Neale Hurston: A Woman Half in Shadow." *I Love Myself When I Am Laughing ..... A Zora Neale Hurston Reader*, ed. Alice Walker. The Feminist Press, 1979.